

侑

京都大学

【目的】神経眼科，斜視弱視外来における障害者手帳取得状況について検討する。

【方法】神経眼科，斜視弱視外来において研究への同意を得られた647人を対象に，障害者手帳に相当する視覚障害の有無および手帳の取得状況を検討した。

【結果】手帳相当の視覚障害は37人(5.5%)に認められた。そのうち17人(45.9%)が手帳未取得であった。視力，視野，性別，診療期間，年齢を投入し，手帳の取得に対してロジスティック回帰分析を行うと，視力が当てはまらないこと(オッズ比5.89倍， $P=0.036$)，診療期間が短いこと(オッズ比5.10倍， $P=0.037$)が手帳未取得のリスク因子であった。

【結論】ロービジョンケアの入り口にもなる手帳取得について，十分でない現状が示された。

23. 滋賀医大における心因性視覚障害の最近の傾向

○岩佐真紀，村木早苗，東山智明，大路正人

滋賀医科大学

対象は1996年から2015年に当院で心因性視覚障害と診断された139例(男28例，女111例)。1996年から2005年に受診したA群(61例)，2006年から2015年に受診したB群(78例)に分け，年齢，性別，受診動機，視力，推定原因を比較検討した。

平均年齢はA群9.4歳，B群10.0歳。性別はA群男10例，女51例，B群男18例，女60例。受診動機は両群とも学校検診が最多で，推定原因はA群では家庭，B群では学校が最多であった。初診時裸眼視力が0.1未満の例はA群5%，B群19%，レンズ打消し法に反応しない例はA群21%，B群62%といずれもB群に多く認められ

た。

近年当院での心因性視覚障害は裸眼視力が悪く，かつレンズ打消し法に反応不良例が多く，原因も学校が増加傾向にある。

24. 心因性視力障害症例における調節検査の有用性

中村 葉¹⁾，小室 青¹⁾，中島伸子²⁾

1)四条烏丸眼科小室クリニック(京都市)

2)中島眼科クリニック(箕面市)

【目的】心因性視力障害を疑った症例の調節安静位や近方負荷時における調節変動量の測定および検討。

【対象および方法】心因性視力障害疑い42例，正常症例167例に，負荷調節レフARK-1s(ニデック)で調節検査を行い，調節安静位および近方負荷時の調節変動量を測定し比較検討した。

【結果】安静位の調節変動量は心因性 $0.40 \pm 0.22D$ ，正常症例 $0.13 \pm 0.01D$ ，近方負荷時の調節変動量は，心因性 $0.75 \pm 0.35D$ ，正常症例 $0.53 \pm 0.10D$ で両者とも心因性症例で有意に大きかった($P<0.05$)。

【結論】ARK-1sにより心因性視力障害疑い症例での調節変動量を数値化し，正常症例に比して調節痙攣の状態であることが確認できた。

25. 小児軽度遠視の診断における調節検査の有用性

○中島伸子

中島眼科クリニック(箕面市)

【目的】軽度遠視診断における調節検査の有用性の検討。

【対象・方法】シクロペントレート点眼下球面度数(cyp値)が2D以下の遠視12例20眼(7.9 $\pm$ 1.6歳)を対象に負荷調節レフARK-1s(ニデック)を用い調節検査を行った。ARK-1sでの球面度数の最大値(FarP)を求め，視力検査での球面